

SAXOPHONE

サクソフォン

ロングトーンは「耳」を頼りに

大石将紀 おおいし・まさのり



- ◆出身 千葉県立船橋東高校、東京芸術大学、パリ国立高等音楽院
- ◆所属 東邦音楽大学
- ◆趣味 旅
- ◆血液型 B型
- ◆星座 おひつじ座
- ◆読者にひとこと 旅に出よ!
- ◆手紙の送り先 BJ 氣付

アンブシュアと楽器を構える姿勢が整い、肺からの息が楽器に入る準備ができれば、今度は楽器に息を入れる番ですね。

■「自分の耳」こそ、いちばんの先生

ふだんからロングトーンをしていますか？合奏やパート練習でみんなと一緒にロングトーンをするのは、「音程を隣の人と合わせる」「音の出だしと切り方を合わせる」など、いろいろな目的がありますが、そのとき自分が出している音や、隣の人の音は、よく聴こえていますか？まわりの人と自分の音を聴き分けるのは難しいので、個人練習にも必ずロングトーンをとり入れて、自分の音がよく聴きとれる場所で練習をしましょう。

これから楽器を演奏していく上で、一生の間いちばん身近にいる先生は、そう、あなたの「耳」なのです！自分の耳で自分の音を聴きとり心で判断し、体を修正して音を、または音楽を磨いていく。これは楽器を演奏する上での、すべての基本です。

■ロングトーンの練習で気をつけること

●音が揺れず、まっすぐにのばせているか

きれいな音の出だしから始まり、音が消えるまで音程の揺れがなく、音量も変わらない、まっすぐな音でのばしましょう。

●自分の音が「理想」に日々近づいているか

「こんな音を出したい」という理想の音はありますか？サクソフォンにもいろいろな音色が存在します。できればプロ奏者のコンサートに出かけて音を聴いてみてください。また、いろいろな国の奏者のCDを聴いてみるのもよいでしょう。国も違えば音も違うので、自分の「理想の音」が見つかるはず。そして自分の音が「理想の音」とどう違うか、よく聴き比べてみましょう。また、比べるためには自分の音をよく分析し、日々の自分の音色を覚えておきます。

■ロングトーンの練習方法

まずは前回、前々回でやったアンブシュア、

口の中の状態、それに姿勢をもう一度確認。

確認できたら【譜例1】を見ながら真ん中のD#をタンギングをせずに音を出してみます。

自分の耳を頼りによく聴きながら、安定した理想の音に近づくようにアンブシュア、舌の位置を微調整します。6月号で紹介した「ヒュー」と言っているときの舌のポジションですが、もし高い音に裏返ってしまうようなら、舌をほんの少しだけ下方向におろしていきます。下がりがすぎると音色が広がった感じになるので注意しながら、ちょうどよいポジションを探します。また、ほっぺたがふくらまないように注意。

安定した音が出せるポジションが見つかったら、そのポジション、また音色をよく記憶し、次の点に注意して練習します。

●音を出している間はアンブシュア、口の中、特に舌を動かさない

安定したポジションを探しているとき以外は、あごや舌は動かないように注意してください。音の出だして音が揺れ動いたり音程が変わってしまうのは、口が安定したポジションで固定される前に息を入れ始めてしまうからです。息を入れる前からアンブシュア、口の中の状態をよく確認し、準備ができれば動かさないようにして息を吹き込みます。

●息に十分なスピードを

息は「量」よりも「スピード」が大切です。顔の前30cmほどに置いたティッシュペーパーを、「フーッ」と勢いよく前に飛ばすときくらいのスピードが必要です。また、息はマウスピースに入れるのですが、ネックの先の方に細い筒があって、そこに息を送り込む

【譜例1】



ようなイメージで細い鋭い息を入れてください（【図1】）。肺から出た息は減衰しないように、音を止めるまで前へ前へとぐんぐん進むイメージで支えていきます（【図2】）。

条件を満たしたまっすぐな音がのばせるようになったら、すべての音で練習してみます。強弱を変えてみたり、クレッシェンド、デクレッシェンドをつけてみたりしても練習してみましょう。

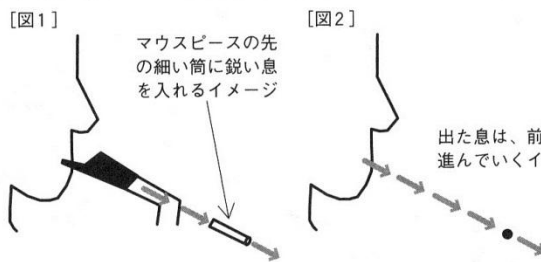
■ロングトーンのポイント

毎日同じ音から練習を始めましょう。アンブシュア、口の中の状態、姿勢をよく確認し、その日のいちばん始めの音で、いちばんいい音を出せるように意識を集中して開始します。

また、そのときの音をよく聴き、どんな音だったか、理想の音に少しでも近づいたか覚えておきます。その日の練習の良かった点、悪かった点を反省したら、次の日は理想により近い音が出せるようにしていきましょう。

■ロングトーン・ちょっと応用篇

きれいにつながったレガートのフレーズを吹けるようにするために、また高音で音程がうわづらなないように、【譜例2】のようにオクターブの跳躍を含んだロングトーンの練習をしましょう。注意点は、上がるときにアンブシュアや息を変えないように、また体に力が入らないようにすることです。スピードのある息を吹き込んだままオクターブキーを押し、滑らかに音をつないでみましょう。



【譜例2】

